

〔論 文〕

ヘルツォーク&ド・ムーロンによる建築のリジェネレーション (テート・モダンとエルプフィルハーモニー・ハンブルク)

満岡 誠治^{*1}

Regeneration in Architecture by Herzog & de Meuron
The Tate Modern and Elbphilharmonie Hamburg

Seiji MITSUOKA^{*1}

Abstract

The aim of this study is to elucidate the architectural characteristics of the Tate Modern and Elbphilharmonie Hamburg, both designed by Herzog & de Meuron. Originally, the firm carefully designed outer walls, exteriors, and coatings, which contribute to the features and charm of buildings. Their regenerative methodology in architectural design for the Tate Modern and Elbphilharmonie Hamburg can be understood as an evolution from the earlier design method of outer walls, exteriors, and coatings. After the Tate Modern, they designed the Caixa Forum Madrid. A piloti-style "plaza" was realized there, which would be seen at the Elbphilharmonie Hamburg as well. Then the appearance of the Beijing National Gymnasium was designed as a translucent mass lump, and mass lumps were also used in the design of appearance for the Elbphilharmonie Hamburg. Additionally, Herzog & de Meuron have been influenced by the thought of Aldo Rossi (1931-1997). Rossi's book "The Architecture of the City" discussed the importance of "urban artifacts" and "monuments", because these elements can symbolically create a form of city. Therefore, it can be considered that the Tate Modern and Elbphilharmonie Hamburg were positively designed to their original shapes.

Key Words : Herzog & de Meuron, Tate Modern, Elbphilharmonie Hamburg, regeneration, Aldo Rossi

1. はじめに

我が国の建築学分野では用途変更を伴うリフォームやリノベーションをコンバージョンと呼ぶが、英国ではリジェネレーション regeneration が同じ意味の用語として使用される。コンバージョンが単なる用途の「変換」を意味するのに対して、リジェネレーションは建築の「再生」を意味する。それは古い建築物に新たな命を吹き込むというニュアンスを持つので、より本質を突いた用語である。現代の西欧におけるリジェネレーションの手法を用いた建築物の代表例として、スイスの建築設計事務所であるヘルツォーク&ド・ムーロン Herzog & de Meuron が手掛けた二つの建築作品



Fig. 1 Tate Modern



Fig. 2 Elbphilharmonie Hamburg

^{*1} 建築・設備工学科
令和元年10月31日受理

が挙げられる。一つはイギリスのロンドンにあるテート・モダン Tate Modern であり (図 1), もう一つはドイツのハンブルクにあるエルプフィルハーモニー・ハンブルク Elbphilharmonie Hamburg である (図 2)。本稿は、テート・モダンからエルプフィルハーモニー・ハンブルクに至るヘルツォーク&ド・ムーロンの建築設計の変遷を俯瞰して、その特徴を論述するものである。

2. ヘルツォーク&ド・ムーロン

ヘルツォーク&ド・ムーロンは、ジャック・ヘルツォーク Jacques Herzog (1950-) とピエール・ド・ムーロン Pierre de Meuron (1950-) によって開設された建築設計事務所である。彼らはともにスイスのバーゼルで誕生し、1970年から1975年までスイス連邦工科大学チューリッヒ校の建築学部で学んでいる。ともに1975年に優秀な成績で同校を卒業し、1977年に同校教授のドルフ・シュネブリ Dolf Schnebli の助手を務めている。その後、1978年に共同でヘルツォーク&ド・ムーロンという名の建築設計事務所を開設している。また1989年から1994年までハーバード大学の客員教授を務めており、さらに1999年からはスイス連邦工科大学チューリッヒ校に所属するバーゼルの建築設計スタジオの教授に就任している。後述するテート・モダンの設計で脚光を浴びて、2001年に建築のノーベル賞と言われるプリツカー賞を受賞するとともに、2007年に我が国の高松宮殿下記念世界文化賞建築部門を受賞している。

3. テート・モダン完成以前の建築作品

テート・モダン完成以前のヘルツォーク&ド・ムーロンによる建築作品においては、モダニズム建築と呼ぶべき単純な箱型の構成によるものが多く見られる。しかし、20世紀前半から中頃のモダニズム建築と異なるのは、建築物の内部のみならず、その外壁、外装、被膜を、精力を注いで緻密にデザインしており、それが建築物の特徴と魅力になっていることである。例えば1984年に設計が始まり、1993年に完成したスイス、バーゼルに建つ「シュッツェンマット通りのアパートメント・商業ビル」を見ると、その建築本体のファサードはガラス張りであるが、その前面を開閉可能な鋳鉄製のカーテンが覆っており、それがこの建築物の外観を特徴付けるものとなっている。さらにその一枚一枚のカーテンには、川の流れのような流線型の細いスリットが穿たれており、あたかも我が国の格子戸のように外部と内部を互いの気配を感じさせながら区切るものとなっている (図 3)。1986年に設計を始めて、1987年に完成したスイス、ラウフェンにある「リコラ社倉庫」は、ハーブ菓子メーカーの自動制御化された倉庫である。通常、倉庫建築は単調で殺風景なものとなりがちであるが、この建築物では水平方向に延びる細やかな多数の庇状のものを、外壁を分節化するように設置し、分節化された壁面の仕上げ材を斜めに取り付けることによって、外壁にリズム感のある深い陰影を生み出している (図 4)。1989年に設計が始まり、1994年に完成したスイス、バーゼルにある鉄道施設である「アウフ・デム・ヴォルフのシグナル・ボックス」は鉄筋コンクリート造の建築物であるが、その外壁には仕上げ材として銅製の帯が巻き付けられており、それが建築物のファサードを特徴付けるものとなっている。さらにその銅製の帯は、窓が付いている部分では垂直から水平に捻じ曲げられてルーバーのようになっており、窓から外部への眺望を確保するものとなっている (図 5)。以上は数例であるが、これらは建築物の外壁、外装、被膜を緻密にデザインするというこの時期のヘルツォーク&ド・ムーロンによる建築作品の特徴を表わすものとなっている。このような建築設計の傾向から、さらに一歩前進



Fig. 3 Apartment and Commercial Building Schützenmattstrasse



Fig. 4 Lagerhaus der Ricola



Fig. 5 Signal Box, Auf dem Wolf

することになったのが、次節のテート・モダンである。

4. テート・モダン

4・1 バンクサイド発電所

現在、ロンドン中心部に建つセント・ポール大聖堂から南側に見てテムズ川の対岸に位置する場所に、現代美術専門の国立美術館であるテート・モダンは建っている。それは旧バンクサイド発電所をリジェネレーションの手法を用いて大規模に改築して、2000年に完成した建築物である。この旧バンクサイド発電所はもともと火力発電所であり、第二次世界大戦後、工場や倉庫がひしめき合い荒廃していたテムズ川南岸に建築家ジルズ・ギルバート・スコット Giles Gilbert Scott (1880-1960) の設計により建設されたものである (図6)。1953年にその半分が完成し、1962年に残り半分が完成してその全容を現した。ちなみにスコットは当時の著名な建築家であり、ロンドンのシンボルともいえる赤い公衆電話ボックス (1924年) やケンブリッジ大学新図書館 (1934年)、リバプール大聖堂 (1978年完成) 等の建築作品がある。スコットが活躍した時代は、すでにル・コルビュジェ設計の建築に代表される装飾性を排したモダニズム建築が登場していたが、スコットの作風は装飾性の強いアールデコ様式に近いものであり、この旧バンクサイド発電所の建築物も同様に装飾性のあるデザインとなっている。バンクサイド発電所は、完成後しばらくは順調に稼働したが、1970年代の石油価格の高騰によって経済的な他の発電方法への転換が進んだ結果、1981年に閉鎖を迎えた。以来、旧バンクサイド発電所の建築物は2000年のテート・モダン開館まで長く使用されない状態であった。(図7)



Fig. 6 Bankside power station, under construction (1952)



Fig. 7 Bankside power station (1985)

4・2 テート・ギャラリーによる国際建築設計競技

19世紀以降の美術品を収集展示するイギリスの国立美術館は、2000年に「テート」とその名称を変更したが、それ以前は「テート・ギャラリー」と称していた。それは角砂糖の製造や特許で財を成した19世紀の実業家ヘンリー・テート Henry Tate (1819-1899) から寄贈されたコレクションをもとに設立されたもので、テート・ギャラリーの前身となるナショナル・ギャラリーの分館が1897年にロンドン南部のテムズ川河畔のミルバンクに開館され、それが1955年以降、独立運営される国立美術館の一つとして、テート・ギャラリーと呼ばれたものである。しかし、それは比較的小規模な美術館であったため、新たに現代美術専用の展示空間が必要となり、1992年にミレニアム (紀元2000年) を記念する新美術館の建設構想が発表されるに至った。この新美術館建設のために複数の敷地が候補に挙がり、1994年に旧バンクサイド発電所がその計画地として決定された。同年、新美術館の設計案を課題とした国際建築設計競技が開催され、世界中から148案が提出された。この応募案をもとに最初に13組の建築家等が新美術館の設計候補者として選出され、さらなる選考の結果、安藤忠雄 (1941-) (日本)、デヴィッド・チップパーフィールド David Chipperfield (1953-) (イギリス)、ヘルツォーク&ド・ムーロン (スイス)、ラファエル・モネオ Rafael Moneo (1937-) (スペイン)、レム・クールハース Rem Koolhaas (1944-) が率いる OMA (オランダ)、レンゾ・ピアノ Renzo Piano (1937-) (イタリア) という6組の建築家或いは建築設計事務所が最終候補者に選定された。1995年、最終審査結果が発表され、ヘルツォーク&ド・ムーロン案が最優秀案に決定された。これは、ヘルツォーク&ド・ムーロン案が旧バンクサイド発電所の原形をリスペクトして最も良く活用するとともに、建築上部のガラス箱の設置を介して多くの光を導入し、機能的でモダンなインテリアを創出していることが評価されたものである^① (図8、図15)。他の案を見るならば、例えば安藤忠雄案では二つのガラス箱のような展示室が旧バンクサイド発電所の建築物のファサードを貫通して、片持ち梁方式でテムズ川方向へ突出したものとなっている (図9)。デヴィッド・チップパーフィールド案では旧バンクサイド発電所正面の煙突部分が

大幅にカットされて、ガラス張りの新しいファサードを創り出すものとなっている(図10)。レム・クールハースが率いるOMA案では既存の煙突のレンガの仕上げが取り除かれ、鉄製の骨組みが露出したものとなっている。また、屋根も透光性のある素材が使用され、縦横に空間が重層するものとなっている(図11)。このように、ヘルツォーク&ド・ムーロン以外の案は、旧バンクサイド発電所の原形を積極的に改変するものであった。



Fig. 8 Herzog & de Meuron's design



Fig. 9 Tadao Ando's design

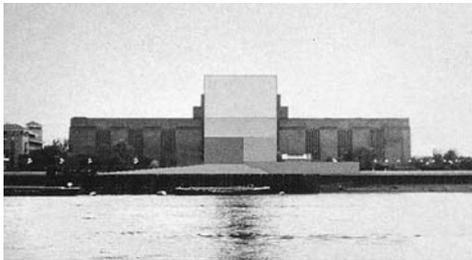


Fig. 10 David Chipperfield's design



Fig. 11 OMA's design

4・3 テート・モダンの完成

ヘルツォーク&ド・ムーロンの設計により、旧バンクサイド発電所を美術館建築へと改築する工事が開始された。工事中の写真により、それが既存の外壁部分を保存し、その中に新たな建築空間を作り出す大規模な工事だったことが分かる(図12)。2000年に工事は完了し、現代美術館であるテート・モダンが開館した。ヘルツォーク&ド・ムーロンはこの設計について、「我々は、バンクサイドに立ちはだかる煉瓦の塊の構造物の物理的な力強さを受け入れ、この建築物を破壊あるいは消去しようとはせず、むしろその魅力を高める計画を行ったのである。」²⁾と述べている。この言葉が示すように完成したテート・モダンは、建築物上部にライト・ビームと呼ばれるシンプルなガラス箱が増築されているが、中央には煙突の塔が聳え立ち、旧バンクサイド発電所の原形を留めるものとなっている。旧バンクサイド発電所は、テムズ川沿いの北側のボイラー・ハウス Boiler house、中央のタービン・ホール Turbine hall、南側の配電所 Switch house という三つの部分から構成されていたが、完成したテート・モダンの内部は、旧バンクサイド発電所の空間構成をうまく活用したものとなっている(図13)。北側のボイラー・ハウス部分に5層(地下1層、地上4層)と、その上部のライト・ビーム部分に2層の合計7層の床が新設されて、エントランス、展示ギャラリー、講堂、教育施設、



Fig. 12 Tate Modern, under construction

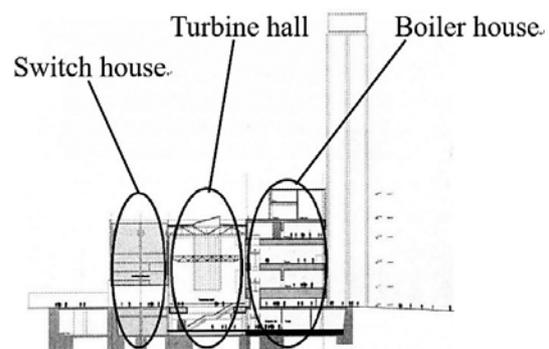


Fig. 13 Composition of section

ショップ、カフェテリア等の複数の機能がそこに配されている。発電機が設置されていた中央のタービン・ホール部分は鉄骨柱がむき出しになった大空間であったが、その鉄骨柱を意匠的に再利用して大規模な展示スペース兼エントランス・ホールが創出されている（図14、図15）。2000年のテート・モダン完成時に、南側の配電所部分はまだ現役の配電所として使用されていたので、そこが配電所としての役目を終える将来には、そこに展示ギャラリーを増築することが計画された。2016年には、南側に「スイッチ・ハウス」と名付けられた地上10階建ての増築棟がヘルツォーク&ド・ムーロンの設計により完成している。尚、テート・モダンが完成した2000年に、テート・モダンのあるテムズ川南岸とセント・ポール大聖堂のあるテムズ川北岸を結びつける歩道橋「ミレニアム・ブリッジ」も完成されており、両者を結びつけた観光エリアが形成されている。



Fig. 14 Turbine hall, past



Fig. 15 Turbine hall, present

5. テート・モダン以降

5・1 カイシャフォーラム・マドリッド

カイシャフォーラム・マドリッド CaixaForum-Madrid は、2000年のテート・モダン完成後である2001年にヘルツォーク&ド・ムーロンによって設計が開始され2007年に完成した。それは、スペインのマドリッドにある美術ギャラリーや劇場等から構成された現代芸術のための複合施設である。興味深いのは、ヘルツォーク&ド・ムーロンがテート・モダンの設計を通して実践したリジェネレーションの手法が、ここでも用いられていることである。当初、その敷地にはプラド大通りに面したガソリンスタンドと、大通りから奥まったところにある1900年代に建設されたレンガ造の旧発電所が建っていた（図16）。カイシャフォーラムの建設に当たりガソリンスタンドは撤去されて、そこに大通りに面するプラザ plaza（広場）が造られた。一方、旧発電所のレンガ造の外壁は保存されて、カイシャフォーラムの外壁の一部として再利用された（図17）。着目すべきは、旧発電所のレンガ造の外壁の下部が切除されて、プラザ plaza と連続する形で、「屋根付きのプラザ covered plaza」と名付けられたピロティ形式の公共的なオープンスペースが設置されたことである（図18）。この結果、カイシャフォーラムの建築本体は、旧発電所のレンガ造の古い外壁を纏いつつもピロティ形式の適用により街路レベルから浮遊したものとなっている（図19）。その一風変わった建築的表現は、「現代芸術」を扱うという非日常性が求められる機能に相応しいものである。このようにピロティにより建築本体を持ち上げて、そこにプラザ plaza を設けるという建築空間の構成方法は、後述するエルプフィルハーモニー・ハンブルクに受け継がれることとなる。

5・2 北京国家体操場

北京国家体操場は、中華人民共和国の北京に建設された2008年北京オリンピックのメイン・スタジアムである。中国政府主催の国際建築設計競技によりヘルツォーク&ド・ムーロンが設計者として選出された。2002年に設計が始まり、2008年に完成した。尚、中国の現代美術家である艾未未（アイ・ウェイウェイ Ai Weiwei）（1957-）が芸術顧問として設計チームに参加している。北京国家体操場の建築デザインのコンセプトは、「鉢 Bowl」であった（図20）。それは巨大な鉢がイメージされたものであり、遠くからも、また、近くからも一瞥して理解される強烈なインパクトを持つシンプルな形態が目指された。しかし、そこにおいて最も刺激的なものは、形態というよりもそのファサードが見せる様相である。すなわち、屋根を支える構造材がランダムな網目状に絡み合い、まるで「鳥の巣」のような様相を創り出していることである（図21）。前述のように、もともとヘルツォーク&ド・ムーロンは建築物の外壁を緻密にデザインする傾向があったが、それがここにおいて二次元的な外壁の枠を飛び超えて建築の構造材と結びつき、三次元的な「量塊」

へと発展しているのである。但しそれは、ソリッドな部分とボイドな部分がランダムに混在した特殊なテクスチャーを持つ「量塊」である。このような建築デザインの発展は、芸術顧問として設計チームに参加した艾未未の影響ではなかろうか。つまり、強度のある線材で芸術作品を創造する艾未未の影響により（図23）、初期のスタディー・モデルの外装の被膜に見られるランダムな二次元的パターンが（図22）、建築の構造材と結び付き、ランダムな三次元的テクスチャーを持つ「量塊」へと発展したと理解されるのである。

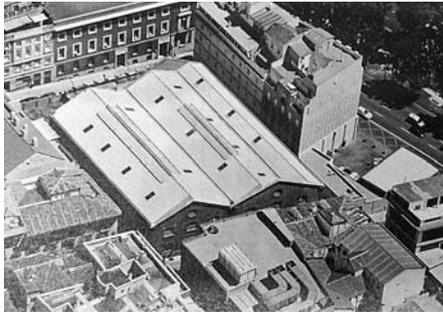


Fig. 16 Old power station



Fig. 17 Preserved outer wall



Fig. 18 Covered plaza



Fig. 19 CaixaForum-Madrid

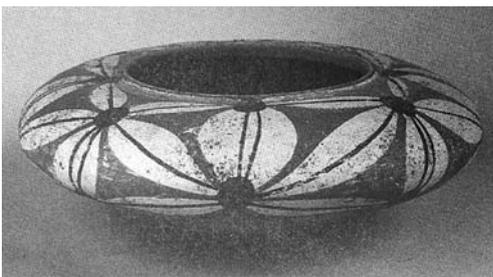


Fig. 20 Chines vessel



Fig. 21 National Stadium

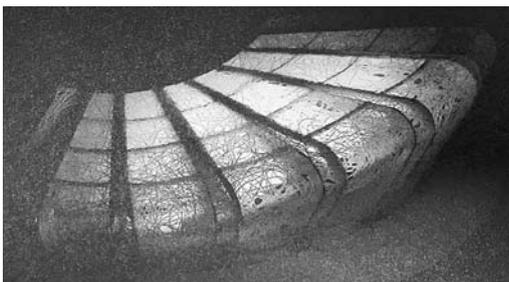


Fig. 22 Early study model

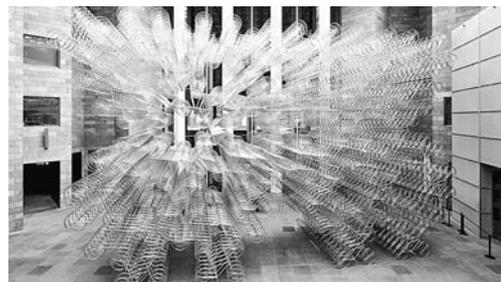


Fig. 23 Art work by Ai Weiwei

6. エルプフィルハーモニー・ハンブルク

6・1 カイシュパイヒャーA

ドイツ北部の都市ハンブルクは、正式名称を「自由ハンザ都市ハンブルク」と言い、エルベ川の河口から約110km 遡ったところにある歴史的な港湾都市である。エルプフィルハーモニー・ハンブルクは、ハンブルクの中心市街地に隣接する港湾地域の埠頭の先端に、2017年にオープンしたコンサートホールを中核とした複合施設である。それはカイシュパイヒャーA Kaispeicher A と呼ばれるレンガの外壁を持つ旧埠頭倉庫の上部に、コンサートホール、ホテル、集合住宅から構成されるガラスの外壁を持つ建築物を増築したものとなっている。カイシュパイヒャーAが建つ以前、そこにはカイザーシュパイヒャー Kaiserspeicher と呼ばれる埠頭倉庫が建っていた。それは1875年の建設で、教会風の塔を抱くファサードが埠頭の先端に向かってつくられており、ハンブルク港の景観的なシンボルとなっていた(図24)。しかし、それは第二次世界大戦下の1943年に爆撃を受けて破壊された。このため1963年から1966年にかけて同じ場所に、建築家ヴェーナー・カルモーゲン Werner Kallmorgen (1902-1979) の設計により新しい埠頭倉庫が建設された。これがカイシュパイヒャーAであり、主にカカオ豆の貯蔵倉庫として使用された。カイザーシュパイヒャーがロマネスクの教会風な建築物であるのに対して、カイシュパイヒャーAはレンガ外壁を持つものの、シンプルな矩形のシルエットのモダニズム建築となっている。このような建築様式の違いにかかわらず、カイシュパイヒャーAはカイザーシュパイヒャーと同様に存在感のある建築物としてハンブルク港の埠頭の先端に鎮座し、景観的なシンボルとなっていた(図25)。だが、1970年代以降、海上貿易において貨物のコンテナ化が徐々に進行し、このような大規模な埠頭倉庫は時代遅れの施設になる。1990年代中盤、ついにカイシュパイヒャーAは埠頭倉庫としては全く利用されないものとなった。



Fig. 24 Kaiserspeicher



Fig. 25 Kaispeicher A

6・2 ハンブルク港の再開発

1997年に開始されたハンブルク港の再開発の対象となったのは、前述したカイシュパイヒャーAのある埠頭を含むエリアである。そこはドイツ帝国時代の1888年に自由港地区に指定されたエリアであり、自由ハンザ都市ハンブルクの主要産業である貿易を担う最も重要な場所であった。このために同年以降、このエリアは聖域化されて人々の居住が禁止された。この方針が変更されたのが、1997年の市議会である。寂れていた港湾エリアの再開発の機運が高まり、1888年以来的港湾都市のあり方が訂正され、港湾エリアへの居住が認められ、活気のある新しい形の港湾都市を意味するハンブルク独自の造語である「ハーフェンシティ Hafencity」の創造が目指されることとなった。それは計画面積約157haの大規模な再開発であり、集合住宅、オフィス、学校や大学施設等の諸機能を含むマスタープランが作成された。しかし、そこに欠落していたのが文化施設であった。この欠落を補うために手を挙げたのが、開発業者のアレクサンダー・ジェラルド Alexander Gerard である。彼は使用されなくなったカイシュパイヒャーAのコンサートホールへの転用を提案した。そして2001年の年末にジェラルドは、スイス連邦工科大学チューリッヒ校の同級生であり、発電所から美術館への転用であるテート・モダンの設計で成功をおさめたヘルツォーク&ド・ムーロンにその計画を依頼した。その際、初めてジェラルドがカイシュパイヒャーAの上部にコンサートホールを載せることを構想し、ヘルツォーク&ド・ムーロンがそのスケッチを表したという⁽³⁾。

6・3 エルプフィルハーモニー・ハンブルクの設計

後にエルプフィルハーモニー・ハンブルクと命名される複合施設の設計は、2003年に開始された。同施設の建設に当たり、当初は再利用が見込まれたカイシュパイヒャーAの構造体は強度不足のために撤去され、レンガの外壁部分のみが再利用されることとなった(図26)。一方、カイシュパイヒャーAに新たに付加される内部や外部のデザインは、可能な限りその原形を再現するものだった。例えば、新たな内部は原形と同様にコンクリート柱が林立するデザインとなっ

ている。また外部に造られた新たなバルコニーも原形である鉄製の開閉窓を模したデザインとなっている。当初、開発業者はコンサートホールの建設費を多少とも補うために、ホテルや集合住宅を別棟のタワーとして、隣接する水面上に建設する構想を持っていた。これに対して、ヘルツォーク&ド・ムーロンは様々なボリューム案を検討した結果、ホテルや集合住宅をコンサートホールと一体的にまとめて、カイシュパイヒャーAの上部に建設する案を選択した(図27)。レンガの量塊の上にクリスタルの量塊が載るイメージが建築全体をまとめるデザイン・コンセプトとなった(図28)。この結果、下段のカイシュパイヒャーAの部分は既存のレンガ外壁を活かした基壇としてデザインされ、上段のコンサートホール、ホテル、集合住宅の複合建築部分はガラスの外壁を用いてデザインされた。ここで興味深いのは、上段のクリスタル部分と下段のレンガ部分の中間帯に、「プラツァ plaza」と呼ばれるオープンスペースが設けられたことである(図29)。これは全方向の眺望が楽しめる展望デッキであり、西側から北側へと広がる中心市街地と、東側から南側へと広がる港湾地区というハンブルクの二つの典型的な都市景観への眺望を可能とするものであった。



Fig. 26 Preserved outer wall

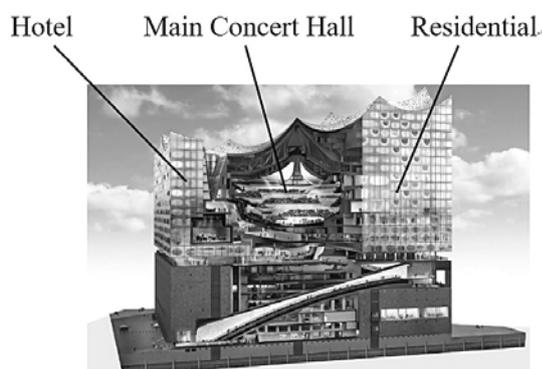


Fig. 27 Building components



Fig. 28 Concept model

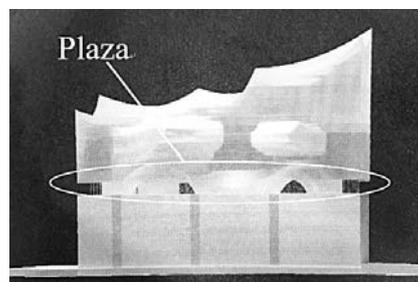


Fig. 29 Early model

6・4 エルプフィルハーモニー・ハンブルクの完成

エルプフィルハーモニー・ハンブルクの建設工事は2016年10月に完了し、2017年1月にコンサートホールが開業した。これとともにハンブルクの著名なオーケストラである北ドイツ放送交響楽団が「NDR エルプフィルハーモニー管弦楽団」と改称し、このコンサートホールを本拠地とした。コンサートホールとして総客席数2,100席の大ホールと650席の小ホールがつくられているが、大ホールの形式はステージを観客席が取り囲むワイン・ヤード型となっている(図30)。建築物全体の形状から制約を受けて、観客席は水平方向ではなく垂直方向へ積層して広がるものとなっており、その結果、観客席とステージとの距離感が狭まり、観客が臨場感を得やすいホールとなっている。一方、プラツァ plaza と呼ばれるオープンスペースは、ハンブルクの都市景観を楽しむために多くの人が訪れる人気の場所となっている(図31)。ここにはカフェが配されているほか、大ホールや小ホールへの入り口も設置されており、床の仕上げがレンガであることもあって、地上からは離れているが、さながら街中の広場のような空間となっている。カイシュパイヒャーAの北側の地上部分に、エントランスが配されているが、このエントランスからプラツァの一階分下にある踊り場へと続く長いエスカレーターが設置されており、それがプラツァや大ホール、小ホールへ向かう人たちの主動線となっている。基壇部分に当たるカイシュパイヒャーAの内部には、エスカレーターの他に駐車場や機械室、音楽スタジオ、レストラン等が配されている。屋根は大天幕のイメージでデザインされた波型の凹凸のある特異な形状のものであり、埠頭の先端部

分が一番高くなっている（図2）。エルプフィルハーモニー・ハンブルクは、旧市街に隣接する「ハーフェンシティ」と呼ばれる再開発の進む港湾エリアに立地しており、旧市街と港湾エリアの両者から望まれるその外観は港湾都市ハンブルクの新たなシンボルとなっている。



Fig. 30 Main Concert Hall



Fig. 31 Plaza

7. 建築家アルド・ロッシの「都市の建築」との共通性

ジャック・ヘルツォークとピエール・ド・ムーロンがスイス連邦工科大学チューリッヒ校建築学部にて在学中、その助教授に著名なイタリア人建築家のアルド・ロッシ Aldo Rossi (1931-1997) がいた。彼らはこのロッシから強く影響を受けたという。ロッシの建築デザインの作風は、ヘルツォーク&ド・ムーロンのそれとは大きく異なる。しかし、ロッシの1966年の著書「都市の建築」を読むならば、テート・モダンやエルプフィルハーモニー・ハンブルクに見られるリジェネレーションの手法と、ロッシの理論とに共通性が存在することに気付かされる。同書においては、建築物として出現する都市的創成物 urban artifacts が、都市そのものを特徴付けるものとして着目されている。特に、都市的創成物の顕著な事例であるモニュメントにおいては、それが「複数の機能を容れることができ、しかもこれらの機能がいわばその建築の形態とは全く無関係に存在し、それでいながら、まさにその形態そのものが私たちに強い印象を与えて」⁽⁴⁾ あり、その結果、モニュメント自体が都市の構造となっていると述べられている（図32）。これはまさに、複数の機能を一つの建築として成立させているテート・モダンやエルプフィルハーモニー・ハンブルクの特徴である。また、同書はモニュメントである古代ローマ時代の円形劇場が後の時代に変容しながらもその痕跡を残すことを紹介し、都市的創成物の形態的な重要性を説明している（図33）。テート・モダンやエルプフィルハーモニー・ハンブルクでは、その原形を持つ形態的なシンボル性が重視され、それが積極的に保持・活用されたが、これは「都市の建築」が述べる都市的創成物の形態的な重要性とその痕跡の持続性へと共通する考え方として捉えられる。



Fig. 32 Monument at a center



Fig. 33 Ancient Roman amphitheater

8. おわりに

もともとヘルツォーク&ド・ムーロンには外壁、外装、被膜を緻密にデザインする傾向があったので、テート・モダンからエルプフィルハーモニー・ハンブルクに至る彼らの建築におけるリジェネレーションの設計手法は、そのような外壁デザインからの発展として理解できる。テート・モダン後に、ヘルツォーク&ド・ムーロンはカイシャフォーラム・マドリードの設計を通してピロティ形式の「プラザ plaza」を実現したが、その手法はエルプフィルハーモニー・ハンブルクにおける「プラツァ plaza」として継承されている。北京国家体操場は三次元的でランダムなテクスチャーを持つ「量塊」としてその外観がデザインされたが、この「量塊」による外観デザインの手法もエルプフィルハーモニー・

ハンブルクの設計に受け継がれている。一方、彼らが影響を受けた建築家アルド・ロッシによる著書「都市の建築」を読むならば、ヘルツォーク&ド・ムーロンが行ったリジェネレーションという設計手法の根底には、都市の構成要素である都市の創成物やその顕著な例であるモニュメントが有する原形としてのシンボル性を重視するという思考が存在すると解釈できる。

文 献

- (1) 生井澤 幸子, “ハンブルク港の再開発 - Speicherstadt から Hafencity へ -”, 川村女子大学研究紀要, Vol. 27, No. 1 (2016), pp. 1 -14.
- (2) 建築と都市, 2017年 3月号, No. 558, 特集: ヘルツォーク・アンド・ド・ムーロン
- (3) 建築と都市, 2002年 2月臨時増刊, ヘルツォーク・アンド・ド・ムーロン1978-2002
- (4) 建築と都市, 2006年 8月臨時増刊, ヘルツォーク・アンド・ド・ムーロン2002-2006
- (5) Mack, Gerhard, “Herzog & De Meuron Elbphilharmonie Hamburg” (2018), Birkhauser Architecture
- (6) Dercon, Chris and Serota, Nicholas, “Tate Modern Building A Museum For The 21st Century (2016), Tate Publishing
- (7) アルド・ロッシ著, 大島哲蔵, 福田晴慶訳, 都市の建築 (1991), 大龍堂, 原著は L'architettura della citta (1966)

図 出 典

- Fig. 1 筆者撮影
 Fig. 2 筆者撮影
 Fig. 3 www.flickr.com/photos/evandagan/2792779274
 Fig. 4 www.bzbasel.ch/basel/baselbiet/
 Fig. 5 ja.wikipedia.org/wiki/ヘルツォーク%26ド・ムーロン
 Fig. 6 www.glias.org.uk/journals/bankside.
 Fig. 7 en.wikipedia.org/wiki/Bankside_Power_Station
 Fig. 8 archpaper.com/2016/05/herzog-de-meuron
 Fig. 9 www.rfi.fr/culture/20181010-tadao-ando
 Fig. 10 文献(6), p. 29
 Fig. 11 oma.eu/projects/tate-modern
 Fig. 12 www.britishcouncil.org/voices-magazine/museums-can-play-role-urban-regeneration
 Fig. 13 www.archdaily.com/429700/ad-classics-the-tate-modern-herzog-and-de-meuron/に加筆
 Fig. 14 www.pinterest.jp/pin/82331499412858985/?lp=true
 Fig. 15 www.inexhibit.com/mymuseum/tate-modern/
 Fig. 16 文献(4), p. 133
 Fig. 17 同上, p. 132
 Fig. 18 architizer.com/projects/caixaforum/
 Fig. 19 www.envolventesarquitectonicas.es/project/caixa-forum-madrid/?lang=en
 Fig. 20 文献(4), p. 140
 Fig. 21 www.chinaculturetour.com/beijing/national-stadium.htm
 Fig. 22 文献(4), p. 140
 Fig. 23 arrestedmotion.com/2015/12/showing-andy-warhol-ai-weiwei-national-gallery-victoria/
 Fig. 24 de.wikipedia.org/wiki/Kaispeicher_A
 Fig. 25 同上
 Fig. 26 文献(5), p. 146
 Fig. 27 www.elbphilharmonie.de/en/elbphilharmonie
 Fig. 28 文献(4), p. 161
 Fig. 29 同上, p. 160
 Fig. 30 www.elbphilharmonie.de/en/elbphilharmonie
 Fig. 31 筆者撮影
 Fig. 32 文献(7), p. 20
 Fig. 33 同上, p. 140

注

- (1) Tate Modern の Home Page, www2.tate.org.uk/archive/journeys/history/html/bld_mod_architecture.htm
- (2) 文献(3), p. 209
- (3) 文献(2), p. 28及び文献(5), p. 28, “a hall above and not inside the existing Kaispeicher, as initially envisioned by Alexander Gerard,”
- (4) 文献(7), p. 19